タンポポだより

vol.39
2021 冬号

―― 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ――

すずき出版発行「心のうたかれんだあ」(平成6年版)より　詩／坂村真民「心一つで」　画／海野阿育

坂村真民記念館
Sakamura Shinmin Museum

坂村家のアルバム

vol.9

コンプレックスと深い孤独から芽生えた文学性

念

念はわたしの体と心のすべてである
体が弱かったから
強くなろうと念じた
背が低かったから
大きくなろうと念じた
どん底に落ちたから
這い上がろうと念じた
何もかも劣っていたから
コンプレックスを持ち
念じてこのコンプレックスと
戦ってきた
念は生まれた時から
わたしの丹田の中で鍛われ
タンポポのように強くなった
念によってわたしは
真の人間になった
だから念は
わたしの骨髄であり
不動明王の剣である

今号は、昂（たかし）（真民の戸籍名）の小学校後半から中学校5年間（旧制）について考えてみました。掲載詩は父・真民が92歳を前にして詠んだもの、詩の2行～11行目に今回焦点を当てた時代の全てがあるように思います。写真は、父がよく口ずさんでいた行基の歌で、自室に掛けていた短冊です。

父親の死後、雨漏りのする小さい家に引越し、山の上の小学校に移り、行きも帰りも山道を通うことに。生徒達も喧嘩ばかり、いつも一人で木や草や鳥たちと心を通わせて行きます。

小学校を終えると、貧しい中にあっても母親は昂を中学に上げ、今度は山坂往復3里（12キロ）を通うことになりました。雨の日は、山道を裸足で歩いたとか。孤独な心に、いつしか行基の歌や芭蕉の句が入り込んできます。

―うきわれをさびしがらせよ閑古鳥（芭蕉）―

生来腺病質で弱かった体も〝歩く〟ことで強くなって行きました。

痩せて小さく背も伸びず、小学校でも中学校でも、事あるごとに一番ビリの方からついてまわり、教室も末席でした。一番嫌いなのは、運動会。当時は村中の人が集まって楽しむ行事でしたが、少年には苦しみでしかなかったのです。特に中学4年になると軍事教練が開始され、手に持つ歩兵銃より背丈が低い者には小さい銃が与えられ、村の中を行進していると指差され笑いの的でした。多感なこの時期、コンプレックスの塊であったろうと思います。

この中で昂少年には、何が起こり何が生まれたのでしょう。

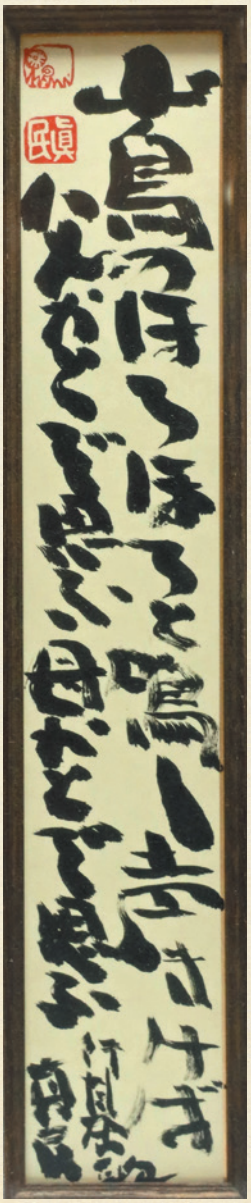
両親が健在で幸せだった頃でさえ、夜中に目覚めては梟の鳴く声に耳を傾けていた繊細な少年です。父の死後生活苦を知り、学校でもコンプレックスから楽しみを見いだせず何時も一人、また長い山道を歩き続ける孤独、それは年月をかけて深まるばかりです。少年の心は奥へ奥へと内面深く入って行きました。真民は後年、この時代の孤独を「あの異常な…」と書きました。ハッとする表現です。

〝異常な〟を〝極み〟に置き換えてみましょう。「きわみに」という詩の冒頭に、〝かなしみのきわみに詩が生まれ…〟とあります。では、〝孤独のきわみに文学が生まれ…〟とは、言

えないでしょうか。少年時代ですから〝文学性が芽生え…〟と言った方がいいかもしれませんね。真民は、「自分の文学は芭蕉から」と述懐しています。意識下であってもその核となるものが生まれた時代、短歌その先には詩へと繋がる、暗くともとても大事な時期でありました。

さて最後に、少年の背丈は現在の高校生の年に、やっと人並みになったとの事です。

文／西澤真美子



山鳥のほろほろと鳴く声きけば父かとぞ思う母かとぞ思う　行基

行基：奈良時代の高僧。民間布教、全国を巡遊して寺・堤・道路・橋などを造った。

表紙の詩

心一つで（71歳）

生きていることが
楽しくならねばならぬ
たとえ貧乏していても
ベッドに寝たきりでも
心一つで
楽しくなれるものだ
光が射してくるものだ

人々の幸せのために
湧出してこられた
仏さま方が
手を差しのべていられるのだ
だからしっかりと
おん手を握って
楽しく生きてゆこう

71歳になり、若い時には感じなかった「生きていて良かった」という心からの喜びを感じることが出来るようになった時に書かれた詩です。
「大いなるものに、生かされて生きているという世界を知ることによって、すべてが変わってくるのであり、生きていることが楽しくなるのだ。」とも言っています。

若い人には難しいかもしれませんが、こういう世界を知ることが出来るようになれば、「心一つで楽しくなれる」のですね。

※「湧出してこられた仏さま方」というのは、法華経に出てくる「釈迦の教え（法華経）を広めるために、釈迦の呼びかけに応じて地の底から湧出してきた無数の菩薩たち」のことです。

警策のように響いた先生の言葉

株式会社致知出版社　代表取締役　藤尾 秀昭

昭和53年の月刊『致知』の創刊以来、編集に携わり、54年編集長、平成4年に致知出版社代表取締役社長兼編集長に就任。月刊『致知』は、創刊以来一貫して人間学をテーマにしており、“一隅を照らす人々”に照準をあてた編集ぶりは、オンリーワンの雑誌として注目を集めている。

坂村真民先生と初めてお会いしたのは昭和六十二年、先生七十八歳、私は三十九歳の時でした。

弊誌『致知』で「言葉は生きもの」という特集を組み、その巻頭インタビューに先生にご登場いただいたのです。このインタビューは『現代の覚者たち』という単行本の中に収められていますが、いま読んでも、先生が目の前で話しておられるような気持ちになります。先生の言葉は三十年の歳月を経てもなお清冽の気に満ち、対する者に迫ってきます。

坂村真民先生の書斎にて

真民先生との出会いで衝撃的だったのは、その翌年「人生の公案」の特集に再度、ご登場いただいた時のことです。

インタビューが終わった後、雑談の中で先生がポツリと「老人は早起きというのは嘘です。私も本当は遅くまで寝ていたい。しかし私が普通の人と同じように遅くまで寝ていて、どうして人々の心に光を灯す詩が書けますか」といわれた後、「創造する人間は絶えず危機の中に身を置いていないといけない」といわれたのです。

この言葉を聞いた時、私は頭をなぐられたようなショックを受けました。目からウロコが落ちる思いがしました。

その頃『致知』は創刊十周年を迎え、私の思った部数も達成し、それまでは必死の思いで仕事に取り組んできたが、もうそろそろリラックスしてもいいか、と思い始めていたのです。その私の迷妄を真民先生の言葉は警策のように打ち払ってくれたのです。

その時、私は「人間というのは大成――一つの道を大きく成していくというのは難しいことだなあ。自分は十年緊張感を持続してやってきたが、もうそろそろいいかと思い始めていた。いかん、もう十年、この緊張感を持続していこう」と決意を固め直したのです。

以来、この姿勢は私の習い性となりました。『致知』は今年創刊四十三年になりますが、今日まで歩んでこられた背景に、先生のこの一言が大きく影響していると思います。

この時から先生の詩魂（詩にかける魂）は私の誌魂（雑誌にかける魂）になったと、私自身は思っています。

先生がよくいっていた言葉があります。人生の目的と人生の命題です。

仕事を通じて自分を作る――人生の目的。

その自分をもって人々の心に光を灯す――人生の命題。

先生はすべての人にそうあってほしいと願っていました。

その思いを、先生に深いご縁をいただいた者として、私も果たしていきたいと念じています。

館長エッセイ

真民記念館10年を振り反って、今後に向かって考えること

まだまだ、真民詩を知らない人がいるということは、これから真民詩のファンを新たに作り出す可能性があることと発想の転換を図り、様々な媒体を使って、記念館の存在と真民詩の魅力を訴えていくことが必要であると思います。

四国の田舎の砥部にある記念館は、坂村真民の生き方と真民詩が生まれた風土をそのまま伝える土地に建てられています。このことを最大限の「売り」にして、坂村真民の生き方と真民詩の魅力を、愚直にコツコツと鈍刀を磨くように、記念館を磨き続けていきたいと思ってます。

また、この記念館が東日本大震災発生の翌年の3月11日にオープンしたことの原点に立ち返り、その後も各地で起こった大きな災害の被災者の皆さんの「思いに共感する」心を大切にし、コロナ禍の中で「辛い悲しい気持ちで生きている多くの人々」へ「生きる希望」と「一緒に歩む友がいる」ことを伝えていきたいと思っています。

私たちは、お金をかけて大きな宣伝をしたり、奇抜な展示で人を引き寄せることは出来ません。「坂村真民の想い」に照らしてもそういうことはしない方がいいと思っています。真民詩を読んで「真民の想いに共感してくださる皆さん」のお力を支えに、皆さんとともに、この記念館を運営していかなければならないと考えています。

どうぞ、もっともっと多くの人に、記念館に来てもらえるように、真民詩の魅力、直筆の真民詩に触れ真民の生き様を感じることが出来る記念館の良さを、周りの方々に宣伝してください。

私と妻は来年には73歳になり、だんだんと気力と体力が減退してきてます。是非とも皆さんのお力を貸してください。どうぞよろしくお願いいたします。

館長　西澤孝一

記念館をより良いものにしていくために、
皆さんのからのご意見・ご提案を募集しています。
どうぞ率直なお声（ご意見・ご提案）をお寄せください。

宛先
メール　nishizawa@shinmin-museum.jp
はがき・手紙　〒791−2132
愛媛県伊予郡砥部町大南705
坂村真民記念館　館長　西澤孝一

坂村真民記念館開館10周年記念特別展

「砥部の砥石で己を磨け
～97年の生涯を生き切った坂村真民の生き方～」展

開催期間 **2022年3月5日(土)～8月28日(日)** 月曜日休館(祝日の場合は翌日)

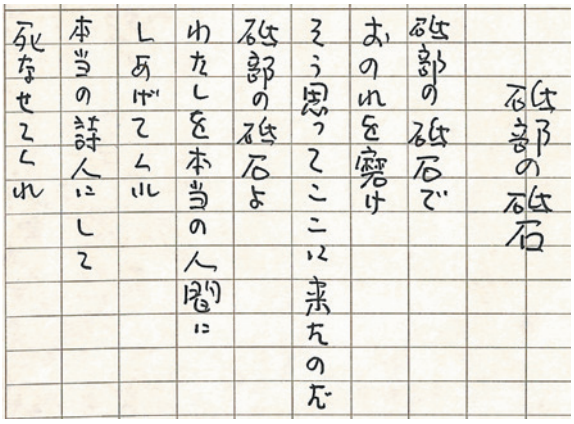
入 場 料／一般600円(前売り券500円)、65歳以上・高・大学生500円(400円)、小・中学生400円(300円)

坂村真民記念館は、今年で10年目を迎えました。今回の10周年記念特別展では、これまでの展示の集大成として、坂村真民の生き方と、そこから生まれた「真民詩」の魅力のすべてを、皆さんに見てもらう構成にしています。そのため、第1展示室では、これまでの10年間に来館された方々のアンケートを集計して、「私の好きな真民詩ベスト15」を選出し、その詩を展示しています。

また、第2展示室では、真民が終の棲家を定めた砥部町の皆さんへのお礼と感謝をこめて、「砥部の砥石で己を磨け～97年の生涯を生き切った坂村真民の生き方～」というテーマの下で、58歳から砥部に住み、97歳まで休むことなく人間としての生き方を磨き続けた坂村真民の生き方と、自分を戒め励ましながら書き続けた真民詩の代表的な作品を展示しています。

このコロナ禍において、人々の生活は大きく変化し、人間としての生き方にも大きな影響を与えています。そういう時代だからこそ、どのような時代においても変わらぬ「人間としての生き方」を求め続けた坂村真民の生き方と、そこから生まれた「真民詩」は、私たちに「生きる道しるべ」を示してくれていると思います。

どうぞ、坂村真民の「97年の想いが込められた真民詩」をゆっくりと鑑賞していただき、これからの人生においてそれぞれの方が、それぞれの人生を考えるヒントにして、生きていって欲しいと願っております。



「開館10周年記念イベント」のお知らせ

- 日時　令和4年 3月12日(土) 開演:午前10時(開場:午前9時30分)
- 場所　砥部町文化会館ふれあいホール(先着順)
- イベント概要
  - ◆真民詩を歌う・合唱コンサート
    - (1)伊予銀行合唱団(松山・混声)
    - (2)GENTLE　GESANG(西予市・男声)
    - (3)重信コーラス(東温市・女声)
  - ◆真民へのメッセージ募集優秀賞表彰式
    - 表彰式　　メッセージ発表(2人)
  - ◆夏井いつきさん講演会
    - 「俳句の力　ことばの力」

経営理念

最大の会社より最良の会社
人さまに喜んで頂く仕事と
自分づくりをする

ホテルクリオコート博多
〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街5-3 Tel 092-472-1111

株式会社 宣翔物産
〒812-0857 福岡市博多区西月隈3-6-17 Tel 092-475-1151

『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曽木材産業株式会社
〒399-5302 長野県木曽郡南木曽町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫
TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 http://www.nagiso.co.jp メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院

To-be
介護付有料老人ホーム トゥービー

介護付有料老人ホーム
To-be
全78居室/20㎡～24㎡(1F&2F)

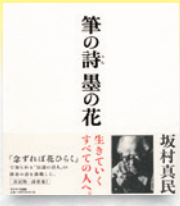
M To-Be
住宅型有料老人ホーム モンレーヴ砥部

住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部
全18居室/40㎡～90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

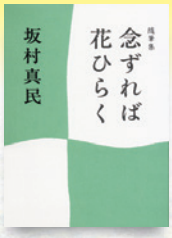
詩墨集 筆の詩(うた) 墨の花



●定価＝本体 3500円+税

坂村真民記念館所蔵の作品を満載！

随筆集 念ずれば花ひらく



●定価＝本体 1800円+税

初めての随筆集を復刻！

念ずれば花ひらく

10万部突破の超ロングセラー！

詩集 念ずれば花ひらく

いま届けたい、生き方の道しるべ

詩集 宇宙のまなざし

詩集 二度とない人生だから

詩集●定価＝本体各1000円+税

サンマーク出版
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
http://www.sunmark.co.jp

致知出版社 坂村真民シリーズ

全424頁、豪華座右版

生涯1万篇以上といわれる
膨大な詩作の中から366の名詩を精選。
長年、真民詩に魅せられ人生を歩む道標としてきた
『致知』編集長が渾身の思いで編纂に当たりました。
心が弱った時、悲しみに直面した時、
ぜひ本書を紐解いていただき、
心の糧となる詩に出逢っていただければと願っています。

坂村真民一日一詩

坂村真民＝著／藤尾秀昭＝編
定価＝本体2,000円＋税
四六判上製

人生で口ずさみたくなる言葉が見つかる

坂村真民一日一言
坂村真民＝著
定価＝本体1,143円＋税
新書判

円覚寺派管長が選んだ真民詩100選

坂村真民詩集百選
坂村真民＝著／横田南嶺＝選
定価＝本体1,300円＋税
新書判

真民氏が自らを励まし、勇気づけるために綴った87篇の詩

坂村真民箴言詩集 天を仰いで
坂村真民＝著／西澤孝一＝編
定価＝本体1,300円＋税
四六判並製

月刊『致知』に掲載された幻のインタビュー集

詩人の颯声を聴く
坂村真民＝著／藤尾秀昭＝聞き手
定価＝本体1,300円＋税
B6変型判上製

致知出版社（ちちしゅっぱんしゃ）
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9
TEL.03-3796-2118 FAX.03-3796-2109

オンラインショップでもご購入できます！
致知オンライン で 検索

坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典	会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典	会員証で入館無料2人、観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧下さい 坂村真民記念館　友の会 検索

〈編集後記〉

テレビで美しい紅葉を映しだしながらの話―落葉樹は、秋になると緑葉に含まれるタンパク質を木の幹に戻し、赤や黄色の葉に変化して散ってゆく、栄養を得た木は冬の寒さに耐え春に芽吹く―というのです。人間より偉いのではと感じ入った瞬間でした。大自然のなせる技・神秘に打たれます。（真美子）

タンポポだより vol.39 冬号
令和3年12月1日発行
発行元／坂村真民記念館友の会事務局
〒791-2132 伊予郡砥部町大南705　坂村真民記念館内
TEL089-969-3643　FAX089-969-3644

［坂村真民記念館］
開館時間／9～17時（入館は16時30分まで）
休館日／月曜（月曜が祝日の場合は翌日）、12月29日～1月1日
入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、小・中学生200円　※15人以上の団体は割引あり